

中国60年代と世界

第2期第4号(通巻第11号) 2017.10.26

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告 福岡愛子、森瑞枝、矢吹晋、朝浩之…(1) / 公開研究会報告…(4) / 10月例会報告概要…福岡愛子(6) / 文革関連図書・逐次刊行物目録…朝浩之編(7) / 印紅標教授「紅衛兵「四旧打破」の文化と政治」について…土屋昌明(11) / 往復書簡:〈二〉の哲学で世界を見る…松本潤一郎・前田年昭(12) / 思想闘争としての「反右運動」…森瑞枝(14) / 『文化大革命を問い直す』正誤表…(16) / 『林昭の魂を探して』字幕(その2)…土屋昌明編訳(18)

例会報告 (8月31日)

ドキュメンタリーを通して「一打三反」を議論

2017年8月31日(木)19時から、専修大学神田校舎204教室で『『白雲における一打三反』を見る』と題して本会8月例会を開催した。担当は鳥本まさき、賈之坦監督『白雲における一打三反』(原題:「一打三反在白雲」、2012年、79分)を上映して議論した。鳥本は本例会のために、賈之坦監督に連絡したうえで日本語字幕を作成した。賈之坦監督については、本誌第3号6頁を参照のこと。監督は、自分の故郷の村で1970年におこった「一打三反」運動での暴行・自殺事件を明らかにしようとインタビューを進める。そのようすを軸に、実際のインタビューの映像を編集して本作は成っている。真相解明とそのプロセスの映像化に対する監督の熱意に感心するとともに、インタビューされる人々の多様さと叙述の精緻さに驚かされる。暴行の目撃者だけでなく、暴行を受けた被害者へのインタビュー、さらに暴行を働いた本人に対するインタビューが映される。暴行を働いた人物が同じ村で現在も普通に生活しているという事実、暴行の事実を得意げに語るという事実、そしておそらくこの状況が中国の農村では普遍的だと思われること、こうした中国社会の奇矯なあり方に気づかされる。また、同一の暴行を加害者と被害者と目撃者から聴きとって対照させており、あたかもスケッチの輪郭線が明瞭になっていくような感覚をいだかされる。この村での「一打三反」は、村の一部の人物が、自身の復讐心と政治的野心を遂げるためにおこった暴行を正当化するのに利用された。彼の復讐心と政治的野心は、これ以前の政治運動で彼自身が同様の憂き目をみたのを承けている。つまり、この村での「一打三反」は、数ある政治運動の一つ

にすぎず、暴力は政治運動の加害と被害のスパイラルに起因している。このスパイラルは全国的であり、文革時期の政治運動と暴力の関係の基本である。このような監督の考え方は、従来の見方をくつがえすものではないが、個別例として実際のインタビューによって示されると、事実の重さを感じさせられる。その一方で、村人のなかには今でも口を閉ざす人々が少なくないことも示されており、隠蔽された歴史を明らかにすることの困難とその克服への情熱も感じとれる。ただし本作では、「一打三反」の政治運動としての側面が軽視されすぎているきらいがある。監督が檔案資料などを参照していることが画面で示されており、インタビュー以外の資料を導入すべきだったかもしれない。おそらく監督には、実際の現場・行動・語りだけから歴史を浮上させようという動機があったのだと思われた。

討論では、鳥本作成の字幕の諸問題と監督の取材内容・映画の構成のわかりにくさなどが議論された。

例会に先立って、同日午後3時から胡傑監督『遠山』(1995年、48分、中国語字幕)の内覧会をおこなった。本作は、青海省の炭鉱で同居しながら働く同郷の青年2人にスポットをあてて、職場の劣悪な環境と重労働、住居での生活、炭鉱町のような、炭鉱経営者などを扱う。胡傑は炭鉱の奥深くまで追跡し、前時代的な手作業を撮っている。炭鉱の現場だけでなく、炭鉱をめぐる周辺的な問題にも目を配っている。とくに、どのように経営されているかまで具体的に撮影している点は、社会問題への監督の見識を感じさせられる。話によれば胡傑は、みずからの不当な経営をさぐられた経営者の怒りを買って猟銃で撃たれ、

弾が顔をかすめたそうである（この件は映画にはみえない）。本作に日本語字幕をつけるための事前内覧であったが、本研究会のメンバー以外に、口コミで映画関係者も参加し、いろいろな意見が出て参考になった。以下は参加者の所見である。

（敬称略、文責・編集部 T）

「一打三反」の記憶に迫る

福岡愛子

これほど心かき乱されたドキュメンタリー作品も珍しい。のっけから自分の知識不足を思い知らされて画面上の文字情報にすがすが、小さいし速いし焦る。映像では監督らしい人物が村の自殺者の記憶を語り始め、その件について聞きたいと、通りがかりの村人に尋ねる。足は止めてくれるが答えはあいまいで、その表情がいい。二人のやりとりを、何やってるとの訝る別な村人女性の声も入ってくる。やがて、次々と探し出されて登場する人物は、1970年に呼びかけられた運動の率先者として取り調べやつるし上げに関与した者たちと、その対象となった人々であることがわかる。加害・被害を問わず滔々と語る男たちと、知らない、どうでもいいという態度の女たちとの対比も面白い。文革中の出来事について、こんなにも直撃的に人々の記憶に迫った記録があったらどうか。いや、そうやって面白がってる自分は何者か、傍観者でいいのか…とザワザワさせられ通しだった。完全に巻き込まれたわけだ。

混沌に筋目を見出そうという試み

森瑞枝

『白雲における一打三反』は「一打三反」の旗印のもとで何がおこっていたのか、それがどう処理されて今現在に及んでいるのか、ある農村の現場の事情を見せている記録映像だった。文革のスローガンをつい十年一日・十把一からげに片付けてしまいがちだが、「一打三反」は70年代の政治運動であった。この映画によって、まずこのことを初めて認識できた。

前回の研究会で申淵氏は、中共政治とは絶えず「政治運動」を繰り返す、政治運動の連なり

に他ならないことを強調されていた。その通り、文革のいかにも革命らしい武闘が早々と鎮圧された後も、文革体制はだだだだ続いていて、様々な政治運動が繰り返されていた。むしろこのだらけた文革期にこそ、新たな摘発、再審、結審によって、政治犯が陸続と検出されて処刑されている。

運動のための運動、脳死状態のごとき70年代の文革に処方された延命処方であれば、政治思想としては無意味だ。だから等閑視されてしまうが、不必要なノルマとして課された延命措置だからこそ、こじつけも理不尽もまかり通る。それで自殺に追い込まれた人が寒村白雲にいた。他の村々にもいただろう。降ってきた運動、「押し付けられた」からには利用して、悪い後味は拭いてやり過ごした。

これを「混沌としてたくましい中国人民」などと感嘆してはなるまい。賈之坦監督は混沌に筋目を見出そうと試みているのだ。この映画に日本語字幕を作成し公開することは、すなわち日本社会に開くことは、賈之坦監督への鳥本氏のエールであるとともに、同じく日本社会の混沌に筋目を通そうとする試みに他ならない。日本語字幕のさらなる創造的工夫を期待している。

「郷鎮企業の労働者」扱いの人びと

矢吹晋

胡傑監督の『遠山』を見た。これは祁連山脈の一角に位置する青海省の炭鉱を撮ったもので、地下の坑道での手作業の映像が印象的だ。狸掘りという日本語がある。地表の露頭から石炭を追って無計画に掘り進む採炭法のことだ。採掘跡が狸穴のようになるためこの名がある。1960年代、日本の主要エネルギーは石炭から石油に大転換し、「黒いダイヤモンド」と讃えられ、頼りにされた石炭エネルギーの時代は終りを告げた。そのころ駆け出しの雑誌記者であった私は、三井三池争議直後の現地取材し、炭鉱離職者がどのような転職を行ったかを聞き取りした体験がある。大型の近代的炭鉱はすべて閉山になったが、ばた山で屑炭を拾い、狸掘りする貧しい子供たちは少なくないという話を聞いた記憶が甦る。

NHK クローズアップ現代（2011年7月28日）は

「炭坑が“世界の記憶”になった」を放映した（その一部が最近再放送された）。これは福岡県筑豊の元炭坑夫・山本作兵衛が描いた記録画や日記が、日本で初めてユネスコの“記憶遺産”に選ばれたニュースを紹介したものだ。作兵衛の描いた半裸の炭鉱夫婦の絵は、「アンネの日記」や「ポルボト大虐殺の記録」などと並ぶ遺産として登録されたという。ユネスコは作兵衛の記録画を「一労働者の目線から描いた炭坑労働の光と影」を描き、「経済発展を支えてきた世界中の労働者の姿に通じる記憶」として評価した由である。

では俊英・胡傑監督の映像はどうか。地底の最も深い箇所カメラを据えて、炭鉱夫が腰をかかめてようやく出入りできる「天窗」を出入りするシーンは、人類が石炭という「天の火」を得て、四つ足歩行から両足で立ち上がる過程を彷彿させるような、神話的幻影を感じさせるほどの迫力だ。

だが、地上へ出て見ると、そこには背広を着て、農民工にわずかな出来高歩合給を支払う「包工頭」がいて、珪肺病で働けなくなった工人等がたむろする。海拔2800~3000メートルの高地だから、現地生まれ育った者でなければ、高山病になるほどの生活環境だ。漢族は少ないのではないか。人々の会話から、ツルハシで石炭を掘り、それを籠に入れて背負い、腰をかかめて地上に運び出す人々は「郷鎮企業の労働者」扱いされている社会的位置づけが分かる。

2000年11月のある日、私は青海省の青海湖へ行く峠で乗っていた車が凍結路でスリップ横転し、命からがら帰国した数日後、Japan Times編集部から問い合わせがあった。TVEs, FIEsとは何かという問い合わせだ。前者はtownship and village enterprisesの略語で「郷鎮企業」、後者はforeign-investment enterprisesの略語で「外資系企業」を指す。世界の工場としての中国を牽引する二つの新生事物の一つ郷鎮企業には、狸掘りをする企業も含まれる。そこには中国経済を支える最低層の人々の生活と、「まだ売れる」泥炭まじりの石炭とがある。映画には映されていないが、ちょっと離れた町には風力発電があり、太陽光発電さえある。文字通り雲泥の差だが、これが中国である。胡傑監督は双葉から芳しい。(2017.9.6)

人にとって労働とは何か

朝浩之

『遠山』は1995年制作、胡傑監督の初期作である。手掘りによる石炭掘りの映像を見て頭に浮かんできたのは、山本作兵衛によるヤマ（炭鉱）、そこに生きる人々の生活を描いた水彩画だ。彼の画を最初に見たのは『まっくら一女鉱夫からの聞き書』（森崎和恵著・山本作兵衛画、現代思潮社、1970年）だったが、過酷な労働に啞然としながらも、描かれた炭鉱夫／婦たちの顔には何とも形容しがたい情を感じ取ったのを覚えている。過酷な労働に体と心が傷つき、死を将来することもあるだろうと想像できるが、他方で、森崎の文にとどまらず、山本の画に、情、人情といった日々の生活の暖かみといったものが感じ取られた。また、小学校の低学年だったが、校内上映された「総資本と総労働の対決」と呼ばれた三井三池闘争のニュース映像を見た衝撃に思い至るまでに、『遠山』は私の心に深く突き刺さった。『遠山』に描かれる採掘は三井三池炭山に比べようもなく、家内労働といってよい。そして、地上、いや外界一切と切斷されたかのように、暗い坑道、というより洞穴の中で、ひたすら繰り返される単調な労働、呟くように吐き出される言葉……。『遠山』は山本の画を直接的に連想させるものではないが、胡傑監督の映像と山本の画には共通して、人にとって労働とは何かという根源的な問いが発せられているとして、私の心中に共振が起こったのだと思う。当時の中国が改革開放から20年近く過ぎ、国家が独占していた炭鉱事業への制限が撤廃されていった渦中に撮られた映像であること、こんにち、好況を終え衰退へ向かう中国石炭業の現状、そうした歴史的視点から見ても興味は尽きない。同時に労働の原初形態を考える上で多くの刺激も与えてくれる。

このように私に思いつくさせてくれることが、このドキュメンタリーの“力”なのだと言いたい。その力の源泉は撮影対象——本作の場合は人物に対する撮影者・胡傑監督の共感が観る者に伝わることにある。胡傑監督の対象に対する距離の置き方がなせるわざなのだと思う。 ☆

公開研究会「強制収容の記憶とテキストと視覚化」報告

張先痴の講演と2本の映画上映によって反右派運動と強制収容を議論

2017年9月30日(土)午後1時30分から、専修大学神田校舎204教室で「強制収容の記憶とテキストと視覚化—張先痴の著述をうけて」と題する討論と上映の研究会がおこなわれた。本企画は、専修大学視覚文化研究会(社会科学研究所特別研究助成)の主催、共催として科学研究費挑戦的萌芽研究「カルチュラル・アサイラム—中国インディペンデント・ドキュメンタリーの生成と流通—」(研究代表者:秋山珠子、課題番号:15K12846)、時代映像研究会と本研究会の協力で実施された。作家として有名な張先痴の講演を軸に、翰光監督による張先痴へのインタビュー映像と解説、張先痴を題材とした胡傑監督『グラグの書(格拉古之書)』(2013年、38分、日本初公開)と邱炯炯監督『痴』(2015年、138分)の上映と討論がおこなわれた(『痴』は29日18時45分から一回先行の上映があった)。

張先痴は、1934年生まれ、1957年の反右派運動で批判され、「労働教養」に収容されたが脱走、ほどなく逮捕されて3年以上も独房に留置され、そのあと「労働改造」に送りこまれた。つごう23年間の人身拘束・強制労働を経験、1980年に名誉回復・釈放後、自分の経験や思索を書いた。近年まとめて『格拉古軼事』『格拉古実録』『格拉古夢魘』(近刊)として出版している。彼のテキストから、50年代から70年代の中国社会のさまざまな側面がみえてくるとともに、反右派運動が中国社会にもたらしたものを考えることができる。さらに、人身拘束の収容所における驚くべき人間性を描いた文学として読むこともできる。胡傑のドキュメンタリーが提示するように、ソ連のグラグの生活を描いたソルジェニツインにたとえられるゆえんである。

講演では、彼の経験の一部と中国現代政治に対する考えが述べられた。日本の人々に反右派運動について語るの、たいへん光栄であり、よろこばしい、と話しはじめた。彼は現在、視力をほとんど失っており、参加者のみつめるまなざしを感じることはできない。しかし、語るにつれて感情は高まっていっ

た。話を聞いてとくに印象深かったのは、彼の抵抗精神の強さであった。まず脱走である。脱走は、1961年10月1日の国慶節の日が選ばれた。象徴的な日であるとともに、お祭り気分、看守にスキが生じる実際的な理由もある。行動をとりにした友人は、篆刻のできる人だった。移動時の交通で印鑑つきの証明書を偽造する必要があるからである。脱走の動機は、無期限の労働教養に耐えられなかったからという。脱走して国外逃亡ができずに捕まっても、おそらく8年くらいの懲役だ。ならば少なくとも無期限ではなくなる。つまり、管理側に迎合して無期限の労働を短くしてもらおうと考えるのではなく、労働教養の理念の不在を見抜いて、計画的に脱走したのであった。つぎに独房である。8ヶ月間、両手をひろげた程度の幅、奥行き180cm程度の独房に明かり無しで入れられた。一般的に、このような独房では精神に異常を来すものであろう。彼は気を紛らせるために、全身のシラミをつぶす作業に熱中した。シラミがいなくなると、過去に暗誦した詩文を想起して朗読した。また、1日300歩の足踏みを課した。3年後に独房から労働改造に移ったとき、さすがに声は出なくなっていたが、体を動かすことができ、看守に驚かれたという。この3年が未決囚としての留置だということからひどい話だ。また独房では、レンガのスキの泥を水に溶かしてインク状にし、布きれなどに細字で文を綴った。見つければ制裁を受けるので、書いたものはレンガのスキにつめたという。反右派運動で収容施設に入れられた人の回想は少ないが、彼のように抵抗精神にあふれ、叙述がウイットに富んでいるものは、多くはないだろう。彼自身は、ロシア文学や魯迅の影響を受けたと述べている。講演内容の詳しい報告は、べつの機会に譲る。

張先痴の作品と人柄に感銘をうけたインディペンデントの映像作家たちが、彼の経験をドキュメンタリーやドラマに表現してきた。胡傑は、張先痴を収容施設のあった場所に立たせて、当時の生活につい

て語らせるという手法をとっている。ランズマン監督『ショーア』に学んだ手法だと思われる。日本語字幕翻訳は石岡亜希子が担当した。邱炯炯は、張先痴の幼少期（中国共産党による革命）から建国後の政治運動で批判されるまでの舞台劇を映像化し、そこに張先痴へのインタビュー映像を挿入している。これらは、張先痴の記憶を喚起させ、記録するだけでなく、テキストを超えて、いかにして記憶を視覚化するかという問題に取り組んでいる。

今回の企画は、反右派運動による強制収容とともに、この視覚化の問題を考えようとするものであった。張先痴の驚嘆すべき豊かな記憶から、個人の経験を具体的に想像すること、それによって固定観念で考えられやすい制度の実際を認識することが重要である（口述の記録、テキストの訳注が必要なのはいうまで

もない）。張先痴は過去の講演で、聴衆から「出土文物」と称されたのが気に入っているようであった。まさしく出土文物とするならば、実物から得られる情報だけでなく、他の文献からも彼の経験をうらづけるような「二重証拠法」をとることによって、より具体的に現代史・中国社会を理解できるであろう。さらに、胡傑が映し出したように、現地の状況を認識すること、邱炯炯が表現したような詩的なイメージーションも必要である。彼らの作品がどれだけ成功しているかは、さらなる議論を待つべきだが、張先痴の記憶の視覚化は、ほかにまだ数名の映像作家が取り組んでいるとのことで、今後も議論を深化させていくべきであろう。

（敬称略、文責・編集部 T）

今後の研究会予定

12 月例会 12 月 16 日(土) 午後 3 時～ 専修大学神田校舎 204 教室

胡傑「星火」上映

傅国涌「現代史における星火事件の意義」(仮)

2 月例会 2 月 22 日(木) 午後 7 時～ 専修大学神田校舎(教室未定)

土屋昌明「2017 年度の研究成果と今後の展望」



研究ノート、史資料翻訳、書評、映画評の他、今号から始めた「交流と相互批判」への皆さんからの積極的投稿を募ります。また第 1 期からの会報合冊本企画を検討中です。希望者はご連絡ください。

[20 ページからのつづき]

張玲：彼女の様子は、笑顔で、左右にお下げをしていた。南中国式のお下げ、当時、南方の人はお下げをこのように結っていた。ここまで。白いシャツを着ていて、下は作業ズボン、労働者ズボンとよばれていた、ここにポケットがついたもの。カットがとても素敵で、上海式のカットだった。

胡傑：張先生、これは当時 4 人で撮った写真？

張：そう。

林昭和张玲等同学 (1955)。

林昭と張玲は 1955 年の同級生だった。

張玲：大家都叫她林姑娘，我觉的她走起路来轻柔的那样，就象形容林黛玉的那几首词：娴静似娇花照水，行动似弱柳迎风，泪光点点娇喘嘘嘘。

張：みんなは彼女を林ねえさんと呼んでいた。歩き方がしなやかで、(紅樓夢の) 林黛玉を歌った詞のようだ。「しとやかな花が水に映え、柳が風にそよぐよう、目は潤んで息も苦しそう」。

林昭和张玲在未名湖畔 (1956)。

林昭と張玲、1956 年、北京大学構内の未名湖のほと。

[26 途中まで。次号につづく]

10月例会（2017年10月26日）報告概要

文革研究の対象と方法——論点整理と見取り図構想の試み

福岡愛子

昨年は文化大革命発動50周年として、国内外で文革を主題とする企画が目立った。私が拝聴したなかで、2016年11月6日に学習院大学で行われた「中国文化大革命研究の新資料・新方法・新知見」と題する国際シンポジウムは、主催者側も、最先端の研究成果を集めた今年最も良かったシンポジウム、と自負する画期的な内容だった。文革研究で知られる著名な教授陣と若手研究者が東西から集い、これまでの文革論議では深まることのなかった暴力の問題を、正面からとりあげて学術的に論じた。

その一方で、国内の学会では登壇者の多くが、自分は常々文革を専門に研究しているわけではないと及び腰だったり、ユニークな観点の提示に終わったり、という傾向もうかがえた。また、若手研究者の活躍が喜ばしい反面、先行研究に対する認識が浅く、60年代という時代性への理解が乏しいことも、そのことに無頓着な様子も、気になった。

たとえば、今では文革が「理想」のために行われたと考えている文革研究者などほとんどいないとみなし、文革中の死者数の推計こそが近年の研究成果であるかのように、その悲劇的な数値に基づいて、文革の「現実」とは共産党国家による剥き出しの暴力と弾圧であった、と断じるような性急な議論には当惑せざるをえなかった。

ところが、そのような実証的研究チームを率いたアメリカの教授自身は、前述の国際シンポジウムでの発表原稿において、実は全く異なる研究姿勢をのぞかせていた。新たな情報源によって武闘の実態を明らかにし、「国家の指令によるテロ」という表現まで使う一方で、そのような事態を生き抜いた人々にとっての衝撃の大きさはいかばかりだったことか、疑問は深まるばかりだったと述べている。具体的な地方ごとの出来事を具体的な時期ごとにたどりながら、幅広いパターンについて我々の理解がシャープになることによって、新たな問いが現れ更なる調査

が必要になる、と統計データが一人歩きすることに抑制的なのだ。

文革のように、一国を揺るがし諸外国にも多大な影響を及ぼした事象については、そのような研究姿勢が何よりも必要だと考える。その上で、実証的研究と体験者の語りとの間の、また様々な当事者同士との間の、対話と協力による重層的なアプローチをとることが望ましい。実際には、中国はもとより日本でも、現状はほど遠く、概して欧米の研究動向に疎かったことも確かだ。私自身もとない限りだが、中国や日中関係について認識不足だったとはいえ、あの時代の空気は知っている。世界的に「60年代」の忘却や隠蔽が進むにつれ、あの時代には、現状への不満を政治化しミクロの現実からの要求をマクロな権力や体制への異議申し立てに高めて、大きな理想を本気で語る人々がいたのだ、という思いを強めている。マスとしての「学生」や「労働者」が存在し、「反戦・平和」だけでなく、時には「革命」さえも共通言語となった、政治的な「大衆運動」の高まりが確実にあったのだ。

及ばずながら、昨年の50周年企画に触発されて、少なくとも英語文献のチェックは怠りなく続けたいと思った。また中国のネット情報やインディペンデント映画など、多様な媒体を生かした研究の可能性も大きくなるだろうと確信できた。

新しい情報源が共有できれば、一層重要になるのは何を対象に、どのような方法と観点で分析するか、という理論枠組みであろう。そこにどのような意味を見いだすかについては、研究者自身の立場性が大きく影響してくる。感情論を排して客観的な研究を目指すにしても、研究そのものが置かれた歴史的・文化的文脈とその限界には、自覚的であるべきだろう。そのためにも、これまでの文革研究が提起してきた主な論点を整理し、それぞれについて、どのような知見が得られてきたか、その成果の上に何を付

け加えることができるか、あるいは、その論点の妥当性を批判的に検討し、何が欠けていたかを明らかにする作業はなおざりにできない。

個人でできることには限りがあるので、これまでに本会メンバーに呼びかけて、それぞれの立場で重要文献と思われるものを提示していただいた。長年にわたり中国や文革に主体的にかかわりながら、恐らくは大きな認識転換を迫られてなお、独自の立場で探求を続けている専門家ならではのコメントもいただいた。それらも参考にしながら、10月26日の例会では、以下の点を中心に文革研究の成果をふりかえり、論点の整序を試みたい。

対象

現象としての文革

日本における多彩な人々による多様な文革論議
英語文献の量的変化にみる海外の注目度

革命としての文革

「永続革命」という文革評価と「主体」論再考
フランス知識人にとっての「文化革命」と「コミュニケーション」

大衆運動としての文革

世界の学生運動の意義と挫折
紅衛兵運動の挫折と新思潮

独裁国家の権力装置と文革

毛沢東の意図と効果——外的／内的要因
「造反」の意味と「造反派」組織の盛衰

方法

実証研究の意義と限界

当事者の語りの受け止め方

社会科学的理解と文学的理解のギャップ

(ふくおか・あいこ)

研究資料

文革関連図書・逐次刊行物目録 (2016年1月～)

朝浩之編

文革五〇周年の作年初から本年8月までに発行された文革をテーマとする図書・逐次刊行物の目録を作成した。本目録は、「文革」「文化大革命」をキーワードとして、国会図書館蔵書検索 (NDL-OPAC)、国立情報学研究所 (NII) がサービスする CiNii (NII 学術情報ナビゲータ [サイニィ]) ——CiNii Books (大学図書館の図書・雑誌検索) と CiNii Articles (論文検索) を検索し、さらに詳細については発行元公式サイトを検索した結果を整理したものである。図書については本体 (税抜き) 価格も記した。図書・逐次刊行物ともタイトルまたはサブタイトルにキーワードが入っている

ものを拾ったが、図書については章または節名にキーワードが入っているものも拾い、その場合は章節名も記した。図書が編著の場合、また逐次刊行物については文革に関わる特集が組まれている場合、基本的書誌情報を記した後、改行して各執筆著者名と論文名も記した。図書については非売品は最後にまとめて記したが、逐次刊行物については区別していない。

なお逐次刊行物中の論文名の後に※が付されているものは CiNii Articles (<http://ci.nii.ac.jp>) の検索結果画面から論文テキストが保管されているデータベースにアクセスできる。

【図書】

- ①楠原俊代著『韋君宜研究—記憶のなかの中国革命』[文革期の韋君宜] 中国書店、A5、551頁、10000円、2月
- ②『中嶋嶺雄著作選集』編集委員会編『逆説の文化大革命』(中嶋嶺雄著作選集2) 桜美林大学北東アジア総合研究所、A5、323頁、3800円、3月
- ③楊海英編『反右派闘争から文化大革命へ』(モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料8) 風響社、956頁、20000円、3月
- ④加々美光行著『未完の中国—課題としての民主化』[中国文化大革命の歴史的意味を問う／文革終焉時の時間

と現代の時間] 岩波書店、四六、276頁、2600円、3月

- ⑤張競・村田雄二郎編『断交と連帯 1945-1971』(日中の120年 文芸・評論作品選4) 岩波書店、327頁、A5、4200円、6月
[「5 文化大革命への礼賛と反発」安藤彦太郎/「文化大革命」の進展、竹内実/毛沢東に訴う〈抄〉、大宅壮一/あざやかな三原色の国、高橋和巳/新しき長城〈抄〉、武田泰淳/中国文化大革命を語る、新島淳良/新しいコミュン国家の成立、中嶋嶺雄/毛沢東北京脱出の真相〈抄〉、井上靖/壺]
- ⑥楊海英著『モンゴル人の民族自決と「対日協力」—いまなお続く中国文化大革命』集広舎、A5、386頁、2980円、8月
- ⑦土屋昌明・「中国六〇年代と世界」研究会編『文化大革命を問ひ直す』(アジア遊学203) 勉誠出版、A5、221頁、2400円、11月
[土屋昌明/文革を再考するいくつかの視点—総説に替えて、朝浩之・金野純・土屋昌明/座談会・運動としての文化大革命、土屋昌明/小説「星火事件」、陳継東/林昭の思想変遷—『人民日報編集部への手紙』(その三及び起訴状)を手がかりとして、前田年昭/下放は、労働を権利とみなし教育と結びつける歴史の実験だった、印紅標/文革時期個人崇拜のメカニズム—ヒートアップとクールダウン、鈴木一誌・土屋昌明・森瑞枝/座談会・文革プロパガンダとは何か—胡傑・艾曉明監督作品『紅色美術』をめぐって、土屋昌明/下放の思想史—大飢饉・文革・上山下郷の農村と知識青年、前田年昭/日本における文革と下放から私は何を学んだのか、朝浩之/私にとっての文革—七〇年前後の学生運動を契機として、松本潤一郎/共和制のリミット—文革、ルソーの徴の下に、及川淳子/現代中国の知識人と文革]
- ⑧楊海英編『フロンティアと国際社会の中国文化大革命—いまなお中国と世界を呪縛する50年前の歴史』集広舎、301頁、3600円、11月 *2016年2月27日開催の国際シンポジウムの論文集
[谷川真一/周縁の文化大革命から文化大革命研究のフロンティアへ、ハラバル/モンゴル人大量粛清運動の政治的背景に関する一考察、ハスチムガ/日本から医学知識を学んだモンゴル人医学者たちの文化大革命、楊海英/ウイグル人の中国文化大革命—既往研究と批判資料からウイグル人の存在を抽出する、劉燕子/文化大革命とキリスト者—「我ら信仰の為に」、馬場公彦/孤立した国の世界革命—1960年代後半日本・中国・インドネシアの革命連鎖、ウスビ・サコ/文化大革命期における中国援助とアフリカ外交の役割、上利博規/フランスにおけるマオイズムは誤解だったのか?—コミュニの起源と行方をめぐって、福岡愛子/文化大革命以後の「文化」の政治、細谷広美/アンデスの毛沢東—先住民、プロレタリアート、農民]
- ⑨楊海英編『紅衛兵新聞1』(モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料9) 風響社、A4、1069頁、20000円、2017年1月
- ⑩王友琴・小林一美・安藤正士・安藤久美子共編共著『中国文化大革命「受難者伝」と「文革大年表」—崇高なる政治スローガンと残酷非道な実態』集広舎、A5、584頁、4950円、2017年4月
- ⑪国分良成著『中国政治からみた日中関係』(岩波現代全書101) [習近平体制と文化大革命] 岩波書店、四六、271頁、2400円、2017年4月
- ⑫明治大学現代中国研究所・石井知章・鈴木賢編『文化大革命—〈造反有理〉の現代的地平』白水社、四六、212頁、2600円、2017年8月
[石井知章/文化大革命の基礎知識、徐友漁/文革とは何か、宋永毅/広西文革における大虐殺と性暴力、矢吹晋/中国現代史再考—ロシア革命百年と文革五十年、中村達雄/革命宣伝画の起源とその展開、座談会・文化大革命と現代世界—矢吹晋氏に聞く、鈴木賢/文革研究の今日的意義を問う—あとがきに代えて]

以下は非売品

- ⑬楊海英編『中国文化大革命と国際社会—50年後の省察と展望』(『アジア研究』別冊4) 静岡大学人文社会科学部・アジア研究センター、B5、242頁、2月 *2016年2月27日開催の国際シンポジウムの論文集
[馬場公彦/孤立した国の世界革命—インドネシア930事件の失敗から文化大革命へ、上利博規/フランスにおけるマオイズムは誤解だったのか?—コミュニの起源と行方をめぐって、福岡愛子/文化大革命以後の「文化」の政治、細谷広美/アンデスの毛沢東—先住民、プロレタリアート、農民、ウスビ・サコ/文化大革命期における中国援助とアフリカ外交の役割、哈日巴拉/整肅烏蘭夫・挖肅"内人党"案的历史背景、动因和决策过程研究—被背弃的国家・政党公约和对多元共存的不容、劉燕子/文化大革命とキリスト者—我ら信仰のために、楊海英/ウイグル人の中国文化大革命—既往

研究と批判資料からウイグル人の存在を抽出する試み、ハスチムガ／モンゴル人医学者たちの文化大革命—「日本」を背負わされた知識人たち]

- ②楊海英・谷川真一・金野純 共編『中国文化大革命研究の新資料・新方法・新発見—50周年からの再スタート』（『アジア研究』別冊5）静岡大学人文社会科学部・アジア研究センター、B5、146頁、17年3月 *2016年11月6日開催の国際シンポジウムの論文集
- [Andrew G. Walder / Rebellion and Repression in China, 1966-1969 : An Overview、宋永毅 / 文革史科学和广西の大屠杀、谷川真一 / 文化大革命の暴力—何が明らかになり、何が明らかになっていないのか、張中復 / 従反共的道統論に國族主義的轉型—中華文化復興運動在臺灣、チョロモン / 中国文化大革命とモンゴル人エリートの動向—作家ウランバガナを事例に、楊海英 / 少数民族の中国文化大革命—国際社会の一部としてのフロンティアへの衝撃、楊海英 / 日本は文化大革命50周年をどう論じたか—中国とその周縁、民族の視点から、楊海英 / 文化大革命と大衆運動] ※

【逐次刊行物】

- ①『過ぎ去らぬ文化大革命—50年後の省察』『思想』第1号（第1101号、1月）岩波書店
- [楊海英 / 思想の言葉 革命歌・声・発声、ロデリック・マックファーカー / 文化大革命のトラウマ、国分良成 / 歴史以前としての文化大革命、加々美光行 / 中国文化大革命の歴史の意味を問う、福岡愛子 / 六〇年代西側諸国にとっての文化大革命—日・仏・米それぞれの意味づけ、楊海英 / 内モンゴルの中国文化大革命研究の現代史的意義、啓之 / 内モンゴル文化大革命における「えぐり出して肅清する（挖肅）」運動—原因、過程、及び影響、ツェリン・オーセル / 殺劫—チベットの文化大革命における一連の事件を手がかりにして、劉燕子 / 社会暴力の動因と大虐殺の実相—譚合成『血の神話』における湖南省道県のケースから、谷川真一 / 政治的アイデンティティとしての「造反派」]
- ②阿羅健一「(朝日新聞解体新書 Vol.12) 報道の魂を北京に売り渡した文革美化報道の数々」『正論』2月号、産経新聞社
- ③二木順子「新时期文学に見る文革期の社会—女性・子どもの日常を通して」『知性と創造 日中学者の思考』第7号（2月）、日中人文社会科学学会
- ④蔭山達弥「中国における文革後の周作人研究について(2) 資料蒐集及び出版を中心に」『関西大学中国文学会紀要』第37号（3月）「河田悌一教授 日下恒夫教授 退休記念号」
- ⑤吉田治郎兵衛「中国の製薬企業急増に関する要因分析（上）建国より文化大革命期まで」『帝京経済学研究』第49巻第2号（3月）
- ⑥『特集 文化大革命50年』『研究中国』第2号（4月）、日本中国友好協会
- [奥村哲 / 文化大革命の起源に関する覚書、下出哲男 / 「階級論」の歴史的帰結としてのプロレタリア文化大革命、好並晶 / 中国映画にみる“文革”叙述の意義—『青春祭』『サンザシの樹の下で』を例に、笈文生 / 「文革」前後の上海、姫田光義 / 文革半世紀、何が変わり何が変わらなかったのか、井手啓二 / 私の文革経験]
- ⑦辻康吾「(中華歎異抄63) 文革前夜を思わせる—中国での二つの論争」『アジア時報』5月号、アジア調査会
- ⑧楊海英「(PERISCOPE Internationalist CHINA) 誠実に歴史を反省せずに50年 習近平の文化大革命が始まった」『ニューズウィーク日本版』5月24日号、CCCメディアハウス
- ⑨『特集『文革』の影を引きずる中国』『東亜』6月号、霞山会
- [武田雅哉 / 闘争する〈小さなもの〉たち—文化大革命と連環画、楊海英 / 少数民族の中国文化大革命、辻康吾 / (ON THE RECORD) 文化大革命は「歴史」となったのか—中国に通底する政治風土]
- ⑩岡田邦宏「(現代史の視角) 文革50年 中国共産党と朝日新聞の「闘」」『明日への選択』6月号、日本政策研究センター
- ⑪松岡誠「(特派員リレー報告54) 習氏の強権ぶりに「悪夢」重ねる声 中国、文化大革命発動から50年」『メディア展望』6月1日、新聞通信調査会
- ⑫楊海英「(特集 中国 方向転換を迫られる巨龍の行方) 歴史 民主化を妨げる文革の呪縛」『ニューズウィーク日本版』6月7日号、CCCメディアハウス

- ⑬「総力特集 一千万人が虐殺された文革50年」『歴史通』7月号、ワック
[富坂聡／習近平が毛沢東になった日、楊海英・宮脇淳子／文革は中華文明の産物である、楊海英／（第一級資料発掘）手記「私の夫は中国人に殺された」ある日本人女性八重子が経験した文革]
- ⑭谷川真一「(世界の潮) 中国文化大革命五〇周年—その「理想」と現実」『世界』8月号、岩波書店
- ⑮「特集 文革50年の中国—共産帝国覇権の野望と死角」『世界思想』8月号、世界平和連合
[「紅い皇帝」へ狂気の独裁権力ふるう 習近平の「第2の文革」／「蔡英文総統」で「仕切り直し」の中台関係「一つの中国」巡る攻防／文革礼賛、林彪事件隠蔽…北京に追従した朝日の犯罪的中国報道]
- ⑯荒牧万佐行「中国文化大革命50年と私」『アジア時報』9月号、アジア調査会
- ⑰「(特集 犬丸義一さんを偲ぶ) 再録(証言) 歴史家、犬丸義一会員に聞く 中国密航から文化大革命まで」『アジア・アフリカ研究』第4号(10月)、アジア・アフリカ研究所
- ⑱山本恒人「文革50年—日本の文革研究の今」『研究中国』第3号(10月)、日本中国友好協会
- ⑲楊海英「(PERISCOPE Asia CHINA) 文革の真実を求める中国国民を黙殺する「日中友好」の呪縛」『ニュースウィーク日本版』10月18日号、CCCメディアハウス
- ⑳「特集 文化大革命発動後50年—文化大革命研究の現在」『中国研究月報』第12号、中国研究所
[川上哲正／「文化大革命発動後50年—文化大革命研究の現在」の特集にあたって、中津俊樹／「50周年」「40周年」そして「35周年」～世界が見た「2016年」、金野純／文化大革命における地方軍区と紅衛兵—青海省の政治過程を中心に、劉燕子／『殺劫—チベットの文化大革命』2016年増補改訂新版を読む—文革は依然として禁区(タブー)『殺劫』は依然として禁書、武吉次朗／毛沢東時代の日中貿易]
- ㉑「特集 文化大革命と現代中国研究」『現代中国研究』第38号(12月)、中国現代史研究会
[渡辺直土／シンポジウム総括「文化大革命と現代中国研究」、谷川真一／文革50年—文革論から文革研究へ、山本恒人／文化大革命50年—終えるべき文革 終えてはならない文革研究—日本における文革研究の今(続編)、金野純／文化大革命研究の回顧と展望]
- ㉒矢吹晋「(中国観照 第23回) 日本から見た文革の衝撃を再考する」『情況』No.3(12月)、情況出版
- ㉓楊海英「(特集 ビジネスマンのための近現代史 ナショナリズム、ポピュリズム、保護主義／PART2 近現代史が語る時代への教訓) 中国とその周縁、民族の視点から 日本は文化大革命五〇周年をどう論じたか」『中央公論』12月号、中央公論新社
- ㉔辻康吾「(中華歎異抄69) 毛沢東思想万歳!! 文化大革命万歳!! 『威本再回憶録』を読む」『アジア時報』12月号、アジア調査会
- ㉕楊海英「中国 大衆扇動が生んだ惨劇 毛沢東が引き起こした文化大革命の狂気」『週刊東洋経済』12月24日号、東洋経済新報社
- ㉖鏡屋一「「文革」期における合唱組曲『長征組歌』とその政治的意義」※『目白大学人文学研究』第12号
- ㉗楊海英「地域研究 文化大革命発動50周年を振り返って」『世界平和研究』2017年冬季号、世界平和教授アカデミー
- ㉘近藤宏一「中国におけるオーケストラの展開—租界から「文化大革命」まで」※『立命館経営学』第55巻第4号(1月)、立命館大学経営学会
- ㉙金野純「(世界史の研究250) 読書案内 中国の文化大革命」『歴史と地理』701(2月)、山川出版社
- ㉚姜若冰「激動期の中国を生き抜いた知識人の体験に見える権力・暴力・民衆—文化大革命期における中国の知識人」『東アジア研究』第67号(3月)、大阪経済法科大学アジア研究所
- ㉛南部広孝・桑原綾「文革後中国における幼児園教育の変容—「幼児園工作規程」を手がかりに」※『京都大学大学院教育学研究科紀要』第63号(3月)
- ㉜宮脇淳子・福島香織・石平・楊海英「おや、また「文化大革命」ですか」『Will』2017年5月号、ワック
- ㉝陳志華「中国文革期の歴史教育と国民意識の形成—中等教科書の分析を通して」『社会科教育研究』第130号(3月)、日本社会科教育学会

- ③横川伸「(中研70年史 その9報告) 初期の中国語研修学校、併せて文革について」『中国研究月報』5月号、中国研究所
- ④楊海英「モンゴル人の中国文化大革命と不名誉な「名誉回復」※『日本文化人類学会第51回研究大会発表要旨集』日本文化人類学会、2017年5月
- ⑤四方田犬彦「(女王の肖像 第4回) 文革切手は赤一色」『kotoba』2017年夏号(6月)、集英社
- ⑥陳破空・長岡義博「中国政治 共産党の闘争は文革の再演」『ニューズウィーク日本版』2017年8月8日号、CCCメディアハウス (あさ・ひろゆき、編集者、本学会員)

研究ノート

印紅標教授「紅衛兵「四旧打破」の文化と政治」について

土屋昌明

紅衛兵の「四旧打破」は1966年8月から9月にかけて北京ではじまり、中共の支持と奨励によって瞬く間に全国へとひろがった。文化大革命の一端を担っただけでなく、人身攻撃と文化破壊において、非常に大きな歴史的な事件である。背後には政治的な矛盾がよこたわっていたはずであり、それを明らかにしなければならない。

このような問題意識が、印教授の研究に一貫している。つまり、文化大革命の諸事件を単純化し、事件の背後に存在した政治的な矛盾葛藤をみようとし、ない態度に学術的にあらがっているのである。

四旧打破の場合、1966年8月8日中共中央八届十一中全会で「中国共产党中央委员会关于无产阶级文化大革命的決定」(いわゆる“十六条”)の第一条で四旧打破が唱えられており、これが紅衛兵の四旧打破の思想的根拠になっている。しかし、実際の行動はこの第一条と異なるものとなった。当時の紅衛兵が四旧打破の実際行動を計画したのは、一般にいわれるような林彪の煽動によるのではなく、彼らの一部がイデオロギーや文化的な領域の四旧打破を、実際の服務部署に対しておこなおうと考えたことによる。

また、紅衛兵の要求には、当時の実際の社会矛盾を反映した側面もある。例えば、かつてのブルジョアが搾取階級として応分の抑圧を受けてはいたものの、居住環境や収入においては、まだ一般の労働者たちよりよい状況にあった。これを抑制しようとした点では、社会矛盾の実際の反映といえる。私たち

は当時の社会をうしろからみているので、実際状況を完全に理解しているわけではなく、そのため往々にして当時の人々が抱いていた不満の実際的な原因に思い至ることができないのである。

紅衛兵世代は、1940年代から50年代に出生し、新中国の教育だけを受けており、とくに57年の「反右派」運動以後の政治教育を受け、毛沢東思想の影響が強い。文革開始時期に彼らは大学生か高校生であり、大学卒業後、農場や鋳工業に参加させられて再教育を受け、それから基幹的な専門業あるいは一般的な職場に配置された。高校生は、卒業後に農村や辺境の生産建設兵団あるいは農場に居住させられ、大部分はいわゆる「上山下郷」の知識青年となり、一部は都市労働者あるいは兵隊になった。1971年におこった林彪のクーデター未遂・墜死事件のあと、こうした青年たちは徐々に選別されて鋳工業にまわったり都市に戻ったりしたが、多くの者は文革収束後にやっと都市に戻ることができた。彼らの中から、政治社会問題に対して冷静かつ深い思考をする者が出た。彼らがいかにして四旧打破という行動をおこしたのか、その政治社会的動因を考えることは、文革の隠された政治背景を考察するだけでなく、彼らの世代の思考方法を考えることにもなる。

* 本稿は、2016年12月10日に青山学院大でおこなわれた印紅標教授の講演に対するコメントである。

(つちや・まさあき、専修大学教授、本会幹事)

交流と相互批判

〈二〉の哲学で世界を見る 往復書簡：毛沢東の哲学と60年代世界

松本潤一郎・前田年昭

相互批判と討議の活性化を期して、「交流と討議」欄をもうけます。今年はロシア革命100周年ですが、ソ連崩壊にいたる76年の歩みをふりかえると、60年代の「全人民の国家」をめぐる中ソ論争および「一を分けて二となす」をめぐる中国哲学界での論争が今もなお、私たちの前にありつづけていることを再確認できます。(編集部)

④〈二〉の哲学をうち立てることが喫緊の課題

9月3日付 前田年昭

階級闘争を離れて哲学はありえず、哲学は現実の階級闘争にいかにも有効かが問われます。

その立場から、“文化大革命から歴史学の方法、歴史哲学として何を学ぶべきか”を再考するとの目的で意見を交わしたく思います。

60年代に文化大革命が、中国だけでなく日本も含めた世界に深く影響を及ぼした理由のひとつには、毛沢東の哲学がありました。結論を先取りすれば「一を分けて二となす」を弁証法の基本法則とする考えです。従来はエンゲルスによる3つの定式(対立・統一、量の質への転化、否定の否定)がソ連でも中国でも教科書でした。毛沢東は、これを三元論だと批判し、対立物の闘争こそが基本の法則だとしました(「哲学問題にかんする講話」1964年8月18日、邦訳は竹内実編訳『毛沢東 哲学問題を語る』現代評論社、1975年)。

この立場は、たちまち現実の世界を明快に分析説明してみせてくれました。米ソの東西対立、保守革新の対立、与野党の攻防は、実は米ソ共同支配、55年体制共同支配、与野党のなれあいではないか、と。当時、第三世界論などが流行しましたが、考え方としては「三」ではなく「二」なのです。ソ連は最初はアメリカと対立した。しかし、対立物の相互浸透の法則ゆえ、ソ連のなかにアメリカ的な思想、文化、風俗、習慣が入り込む。やがて全人民の国家、平和

共存などといひます。実は同じ穴のむじなではないでしょうか。

初心にかえれば、米ソの共同支配に対決するという基本の旗を立てねばならない、というわけです。こうして、世界中の共産党がふたつに分かれました、〇〇共産党(□□□)として(カッコのなかの□□□にはマルクス・レーニン主義派とか革命派とか左派とかが入った)。身のまわりの現実に対しても有効でした。労働組合は資本とグルなのではないか。労働者というけれど上層労働者、労働貴族として労働者を圧迫しているのではないか。等々。

「階級」という立場があいまいになり、消し去られつつある今、「二」の哲学をうち立てることは、基本的で焦眉の課題である、と私は考えています。

④〈多〉を装う〈一〉が支配している

9月10日付 松本潤一郎

今日、私たちが政治を考えると、しばしばその思考は「多様性の擁護」や「他者との共生」といった語彙を用いて組み立てられます。そして、例えば抑圧や組織を〈一〉に象徴させ、〈一〉に抵抗する〈多〉を対置する。

ですが〈多〉は容易に〈一〉に転化します。私たちは多様である。ゆえに私たちが連帯するには、シングル・イシューに的を絞る必要があるという論理です。そして「それ以外のイシューをもちこむな」となり、〈多〉の論理は抑圧に転化する。

一つの標語の下に結集するとき、人びとは〈一〉に自発的に隷従しているとはかぎりません。標語を通してみずからの経験を、それぞれのしかたで語りだすこともあります。この場合、標語は一つのきっかけであって、真の意味での〈多〉はここに現れます。人びとが各々の生活における経験を語りだすとき、その言葉は、私たちは同じ世界に生きており、その様々な側面を語っているという信頼に支えられ

ています。この信頼において発話は可能になるはず
です。

〈多〉を前提する思考には、この信頼がありません。
〈多〉はすでに与えられたものであって、見いださ
れるまでもなく、自明なものと思なされるからです。
この思考にとって、人びとと各々の発話は、同じ世界
に生きているという感覚に裏打ちされていません。
逆に、人びとは各々の世界をもっていると見なされ
ます。各々にすでに各々の世界があるなら同じ世界
など不要であり、信頼も、信頼に支えられる言葉も
無用です。したがって〈多〉を前提とする思考は、「連
帯」するために、シングル・イシューのためと称し
て、特定の誰かの世界観を人びとに強いることにな
ります。〈多〉の〈一〉への転化です。こうなると、
そもそも人びとが集う意味も消えます。この消滅を
担うのが、〈多〉を称揚する思考です。

〈二〉の哲学とは、〈人は各々の世界をもつ〉と〈人
びとは同じ世界にいる〉を分ける作業です。そこで、
〈多〉を装う〈一〉が支配する現状を脱するには、〈一〉
と〈二〉のせめぎ合いという視点から、歴史を展望
する必要がでてきます。

◎歴史家は通史が書けなくなっている

9月17日付 前田年昭

〈多〉を前提する思考には「私たちは同じ世界に
生きており、その様々な側面を語っているという信
頼」がない、との指摘に同意です。しかし、ここで
「人びと」と一括できるのか。たとえば、北朝鮮ミ
サイルを脅威と感ずる人びとと、安倍政権の対応を
脅威と感ずる人びと。国民の物価高騰感が問題だと
する人びとと、実際に高い物価に困っている人びと
……。先の指摘は「人びとが各々の生活における経
験を語りだすとき」と前提されているので、ここで
例示した断絶は、日常生活で顔を合わせる関係では
見えにくいかもしれませんが。しかし「人びと」を二
つに分けることは避けて通れませんよね。「〈人は各々
の世界をもつ〉と〈人びとは同じ世界にいる〉を分
ける作業」とは、局外にはいない自分自身がどの類
の一員なのかを見きわめることであり、必要なこと
は、知識の不足を補うのではなく、知識の錯覚を

ただすことではないでしょうか。

毛沢東は、分析と総合について論じた前掲「哲学
問題にかんする講話」のなかで、「ひとつが、ほか
のひとつを食い、大きな魚が小さな魚を食う、これ
が総合である」といっています。生活に即して、対
立・統一を考えたい。資本と権力が「脅威」を煽り
立てる北朝鮮ミサイルとは何か。庶民は分析を加え
ています。頑丈な建物にこもり、窓をしめようが、
麦だろ、騒ぎはこっけいだ、と。かつて国際共産主
義運動を二分した中ソ論争の、対立のひとつが核で
した。ソ連指導部は、「階級闘争は古くなった。核
戦争は地球を壊滅させるから、世界の矛盾は、帝国
主義と被抑圧階級とがともに生きのびるか、それと
もすべて絶滅するか、というただ一つ」と主張しま
した。この核迷信、核恐喝から、彼らは世界平和の
ために米ソ二大核保有国の協力を説きました（核拡
散防止とは、彼らによる核占有の防衛）。階級融和
か階級対立か、両者は非和解的であり、〈二〉の哲
学は後者の立場です。

「大きな物語」の終わりが語られて以降、歴史家
は通史が書けなくなっています。時代区分できなくな
った、時代を分けられなくなったからではないの
でしょうか。

◎差異の肯定を装った分断と個人主義が通史記述を妨げている

9月24日付 松本淳一郎

前田さんが触れられた、核をめぐるソ連指導部の
見解は、一九七〇年代フランスで出現した新哲学
派（元毛派です）と同じ論理です。彼らはマルクス
主義を「人類」を抑圧する悪の温床と見做し、革命
を目指す運動は人権侵害に転ずると言った。一見ソ
連とは対立しています。しかし、現状の矛盾を「人
類」という〈一〉で隠した点で、彼らの思考は当の
彼らの敵と同じです。核で人類が全滅するでしょ
うか。支配階級は己の富を用いて生き残ろうとし、生
き残るために資本を科学に注ぎ込み、被支配階級（AI
やクローンも含む）に放射能を処理させるために、
結局は生かしておくでしょう。ですから「人類」と
いう〈一〉で世界を覆おうとする者は、無自覚に支

配階級に従っています。被曝は〈平等〉ではありません。

今日の日本国憲法九条改正反対運動や脱原発運動の中にも、〈一〉派がいます。これが前田さんの言われる「錯覚」でしょう。彼らは人類平和の名において、実質的に支配階級の存続を主張しているのだから、ことによると己もその末席に加わりたいたすら考えているのかもしれませんが。そして現政権の高支持率を見て、例えば「政権支持者は権力に自発的に隷従しているのだ」と言います。支配階級に従っているのは実は自分たちであるにもかかわらず。

北朝鮮の「脅威」は、現在の世界秩序と安全保障を維持するための、強国による措置でしょう。これは支配階級のための「安全」以外のものではありません。誰にとっての「安全」や「脅威」なのか。そ

れを知った者が〈二〉に分けることができます。日米中露北朝鮮の首脳は、或る意味で共謀しています。

〈一〉派は多様性・他者・差異を称揚します。各時代の差異を強調すればするほど、通史記述は困難になります。逆説的にも、差異を各々に固有のものとみなすことには、差異を同一化し、固定する危険があります。多様性の共存を説く者の一部は、各差異に「お前は自分の場所から出るな」と命令しているのです。これは差異の肯定を装った諸個人の分断です。個人主義が通史記述を妨げています。

(不定期掲載)

(まつもと・じゅんいちろう、言語労働者)

(まえだ・としあき、組版編集者)

公開研究会 (2017年6月24日) 申淵報告「反右運動の歴史的淵源」への感想

思想闘争としての「反右運動」

森瑞枝

中国現代史における1957～58年の資産階級右派分子に反対する運動（反右派運動）の政治思想的意味については、研究も低調で、いまひとつ認識されにくかった。それは、この問題に対する政治的抑圧を差し引いても、「反右派運動」の評価が、一党独裁の仕上げ、「百花斉放・百家争鳴」の結果（反転、ゆきがかり）、文化大革命の前段階（地ならし）などと、大規模に実施された政策だったのに、政治的には付随的であって、どこか他人事のように、要は知識人の処遇問題として位置付けられてしまうがゆえと見受けられる。

対して申淵氏は、この運動で右派分子とされた当事者であるが、申淵氏のテーマは「反右派運動」という事件ではなく、「反右運動」という中国共産党の手法である。

申淵氏の「反右運動」という概念は、「反右派運動」に従来と違った視座を提示する。「反右派運動」の「右派」という呼称の虚構性は周知の事柄であるが、申淵氏の提唱する「反右運動」は、用語の言い換えや修正にとどまるものではなく、結党から今日

に及ぶ中国共産党の歴史全般を見通す視座である。また、当研究会でも延安整風運動、ソ連との関係に留意してきたが、申淵氏の報告は、中共および中国内部の事情とコミンテルンとの関係をはじめとする国際的な政治状況が交錯するなかで、時々必要に即して「右」が捻出されてきたことを具体的に示した。「右」の一般的な定義は不能なのだ。

そうすると、「反右派運動」を「1957～58年版反右運動」としてあらためてポジショニングする必要が生じる。この時の「右」とは、党に意見する“思い上がった知識人”であった。中共の公式見解では、「反右派運動」は一党独裁実現のために必要な政治運動である。ならば、“思い上がった知識人”はどうして一党独裁の障害になりうるのか？それは口実にすぎず、「百花斉放・百家争鳴」が「反右派運動」に転じる経緯に、内政上の矛盾や中共内部の権力闘争が隠されているのか？建国からすでに10年、知識人民主勢力はむしろ党の補完分子といえ、中共も知識人を活用して度量の標識とし、ソ連に優越しようとしていた。鼻持ちならない士大夫的知識人もいた

だろうが、文字通り「為人民服務」を志して物申した人々を潰し、社会を悪くして終わった「反右派運動」だった。誰が見ても、あからさまな騙し討ち以外の何ものでもなく、社会の活力を殺ぎ、政権に対する信頼を毀損しただけではないのか。それまでは党内の運動だった「反右」を党外知識人に拡張した「反右派運動」は、中華人民共和国を、デマと恐怖の中で人々がまず保身を図らねばならない社会にしまった。しかし、つとに鄧小平すら疑義を漏らしているように、「反右派運動」は本当に党にとって必要な政策だったのか？この運動の見え難さは、政治的な必然性の乏しさを物語っているのではないのか？つまり、毛沢東個人にとって必要だったのではないのか？

申淵氏は、中共の「反右」の反復が、毛沢東のイニシアチブにより、中国共産党に対するコミンテルンやソ連の指導と運動していることをあとづけている。また、中共が建国までは一党独裁を否定していたこと、それがいきなり独裁前倒しに転じたことを確認し、そこにスターリンに対する毛沢東の対抗心を見てとっている。毛沢東がスターリンを強烈に意識し、敬意とともに対抗心を抱いていたことは、李銳も証言している（翰光監督によるインタビュー映像 2017）。申淵氏の論説や李銳氏の証言を追っていると、毛沢東を突き動かしていたのは、内政の実際問題よりも、スターリンに追いつけ追い越せ、世界の革命指導者としての自負、メンツの問題だったのではないか、という気がしてくる。

かねて指摘されているとおり、「反右派運動」の展開にはフルシチョフのスターリン批判(1956年2月)が影を落としている。では、スターリン個人崇拜に対するフルシチョフの批判が問題なのか？しかし「反右派運動」へ舵をきった時点では、まだ中共指導層に個人崇拜批判は浮上しておらず、その点での領袖毛沢東と党中央に矛盾はない（印紅標2016）。

申淵氏は「反右派運動」に特有のエポックとして、フルシチョフのスターリン批判とともに、1956年10月のハンガリー動乱に、より直接的な「反作用」を見ているようだ。毛沢東は、ハンガリー動乱の主体を知識人と見て、知識人は階級闘争と個人崇拜を否定する反動勢力だと再認識したと。だとすると、

毛沢東の知識人に対する主観が作用したということになるだろう。ハンガリー動乱は第一義的には外国勢力（ソ連）からの自立、自主決定権の要求であって、個人崇拜・階級闘争否定のための動乱ではなかったのだから。

思うに、毛沢東がハンガリー動乱から受けた衝撃は、個人崇拜が否定されたことよりも、一旦はスターリニズムを受け入れたはずの、軍事的にも経済的にも圧倒的に劣位の小国が、しかもその権力の周縁の一般人民が、自発的に社会主義を“修正”しにかかった、その事自体ではなかったか。毛沢東には無力に見えた者たちが、あのスターリンを出し抜いて、第二第三の社会主義の可能性をかけて戦ってみせたのだ。ソ連は軍事力でこれを潰し去ったが、政治思想を打ち負かしたわけではない。スターリニズムが、少なくともスターリニズムだけが、革命の最前線、政治文明の前線ではなくなったのだ。申淵氏の紹介する内部檔案、林昭と「星火」の人々の証言などによって、現に当時、中国の知識人たちがユーゴやハンガリーに注目していたことがわかっている。

毛沢東の社会主義に第二第三はない。ということは、毛沢東の想像力はスターリニズムを超えなかった、ということだ。もとより、毛沢東がそんなことを絶対に認めるはずはない。敗北を未然に防ぐための「反右派運動」ではなかったか。

ハンガリー事件はまた、民主化という政治目的の吸引力、民主化に理想をかける人々の粘り強さを毛沢東に気づかせたのではないか。中国の民主を求める知識人も、中共に寄り添いつつ、しかも毛沢東のオーラに呑まれることなく、粘り強く、自らの理想によってたち、より良き社会の建設に参画しようとしてくる。こうなると、民主派知識人という存在そのものが、すでに個人崇拜の否定ではないか。だから毛沢東は、民主派知識人という存在そのものを弄び、ぶちのめした。

無力感に苛まれ、退場し去るかと思いきや、「右派」は懲りることなく、自らの理想を問い、毛沢東に對峙し、その後継者たちに訴え、中国の民主と科学を掲げて怯まない。「反右運動」とは、まさに思想闘争であり、今現在も続いている。

（もり・みずえ、学芸家）

『文化大革命を問い直す』正誤表

『文化大革命を問い直す』（勉強出版「アジア遊学」2016年11月）では、会員諸氏のご執筆・ご協力に心から感謝いたします。文革に関わるユニークな論集として、価値の高いものになったと思います。さて、本書の仕上がりについて、問題がいろいろあることを認識しました。編者の筆頭であり、二校を通して見た者として、以下に正誤を示すとともに、読者および執筆者・会員諸氏にお詫びを申し上げます。（文責・土屋昌明）

カバー

写真の毛沢東の頭の所に段差があって違和感が強く、プロカメラマンの荒牧万佐行さまの写真に加工するのは好ましくなかったと思います。荒牧万佐行さまにお詫び申し上げます。

p.13 タイトルクレジット

【誤】朝 浩之× → 【正】朝 浩之

【誤】金野 純× → 【正】金野 純

p.33 タイトル下

【誤】本書一三頁参照。

→ 【正】略歴は本書一三頁参照。

p.34 上段

写真が傾いているのを直す。

pp.87-88

本誌17ページの【説明】を参照のこと。

p.91 上段注(1)

【誤】『走向林昭』 → 【正】『走近林昭』

【誤】民報出版社 → 【正】明報出版社

p.92 上段注(6)

【誤】張元勛 → 【正】張元勳

【誤】「北大往事と林昭」

→ 【正】「北大往事与林昭之死」

p.92 上段注(7)

【誤】一九四頁。 → 【正】一九四頁

p.102 上 後ろから4行目

【誤】賤 → 【正】賤

pp.94-109 註釈番号を付ける位置

【誤】句点および終わり括弧類にかかっている →

【正】末尾の漢字仮名に下揃え

※なお、これは他の文章もすべてにわたっての誤りです。

p.110 注(13)

「廖亦武」のフリガナの「リャオ」を「廖」にあてる。

p.111 著者紹介

【誤】（五五九号 → 【正】五五九号

【誤】（森話社 → 【正】森話社

p.127 頁下段

【誤】つまり「領袖」という語の含意が、党首から毛沢東その人へと変容を追跡するものである → 【正】つまり「領袖」という語の含意の、党首から毛沢東その人への変容を追跡するものである

p.128 タイトルクレジット

【誤】鈴木一誌× → 【正】鈴木一誌

【誤】土屋昌明× → 【正】土屋昌明

※執筆者プロフィールが鈴木一誌さんだけになっています。これは、ほかの執筆者は再掲で、プロフィールが「〇〇頁参照」となるのを嫌い、土屋がこのような形に提案したものです。

p.136 上 後ろから6行目

【誤】九九年 → 【正】八九年

p.170 タイトル下

【誤】本書一三頁参照。

→ 【正】略歴は本書一三頁参照。

p.178 下段6行目

【誤】（廖亦武、塩亭出身）

→ 【正】（廖亦武、塩亭出身、土屋注）

p.187 タイトル下

【誤】本書九四頁参照。

→ 【正】略歴は本書九四頁参照。

p.196 タイトル下

【誤】本書一三頁参照。

→ 【正】略歴は本書一三頁参照。

【説明】林昭引用文日本語訳の訂正

陳継東

拙稿「林昭の思想変遷—『人民日報編集部への手紙』（その三及び起訴状）を手かがりとして」の中で引用した林昭のテキストの日本語訳に、明らかな誤りがありました。十分な推敲を経ぬまま投稿してしまい、掲載書を読み直して始めて気付いたもので、真にお恥ずかしい次第です。この場を借りて訂正させて頂き、読者各位にお詫び申し上げます。

また、本書掲載の訳文には、一部内容の省略があります。本来なされるべき説明を欠いていたことも、不適切であったと言わねばなりません。以下に掲載する中国語原文と改訂訳文において（ ）で括られた部分が、掲載時に省略した内容です。

pp.87-88頁、注22

【誤】どのような時、場所、またどのような状況であっても、私が反右派を茶番劇として攻撃するのは、決して何らかの個人的原因によるものではないことを強調しておく。この茶番劇は、林昭個人だけを対象にしたものではなかったからである。この茶番劇が、根本的な政治態度を選択する余地を消滅させたからである。私は、自分が暴政の奴隷のような存在に墮落することを甘受出来ないのであれば、いわゆる右派になって共産党に対立する立場を取る以外に道は無かったのである。

【正】どのような時や場所また状況下であったかを問わず、私がああ反右派運動という恥ずべき茶番劇を批判するに当たって、個人的な恨みつらみのようなものを強調したことは、一度たりともない。（個人的には、天ほど高く、

地ほど厚い、この上なく大きな無念があるのだとしても、中国大陸知識人層と青年たちの天を覆うような血と涙のような大海を思えば、それは、その中の一滴というに過ぎないだろう。）この茶番劇は、林昭個人だけを対象にしたものではなかったが、（私にとっては、自分をその天をも覆う血と涙の大海の中の一滴と考えるのがむしろ普通なのだが、それはともかく、）事態の発展は、人をして根本的な政治態度の上で決定的な選択をせざるをえない状況に追い込まれるに至った。（その結論は…言ってみれば簡単な話で、以前にもほかの人々に公言したこともあるのだが、）私は、自分が墮落して、甘んじて暴政の奴隷となって共産党と一緒に、反右派運動に加担するようなことは到底耐え難いわけだから、そうである以上、自らその「右派」であることを認めて、「反共」の立場を取る以外ないではないか。

【参考】中国語原文（第26頁）

无论在何时何地何种情况下，我攻击反右那回臭名远扬的丑剧，都从不强调什么个人的委屈之类。（个人纵有天大地大无大不大的委屈，总不过是大陆知识界与青年群那怨恨滔天的血泪汪洋之中一滴水吧。）这场丑剧并不是专对林昭个人的，（在我说来倒更习惯于把自己这滴水放在那个那个滔天的汪洋以内！不管怎么地吧，）事态的发展总是已经到了逼得人们不能不在根本的政治态度上有所抉择之地步。（那么…话要说起来呢也不费多少辞藻，而且以往对着人们也不是没有说过：）既然我不能容许自己堕落到甘为暴政奴才之地步而跟着共产党反右，则只好坐定了所谓的右派而来反共了。 ☆

会報第 2 期第 3 号正誤表

以下、おわびして訂正します。

p.15 右「七」の 2 行目 【誤】できあに。 → 【正】できない。

p.63 右「七」の 12 行目 【誤】なち → 【正】など

胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕（その 2）

土屋昌明 編訳

[前号からのつづき]

014



解説：1950 年 8 月蘇南新專の同学全部下基层支援地方工作。林昭参加了土改工作队，深入到苏南农村。

解説：1950 年 8 月、この蘇南専門学校の生徒は全員、基層支援に下放した。林昭は土地改革隊に参加、蘇州南部の農村に深く入った。

015



倪競雄和林昭の合影。

林昭とならぶ倪競雄の写真。

問：土改工作就是让你们去把地主的分给老百姓，整个过程叫土改是吗？

倪：最要紧的是把地主的威风打下去。

胡傑：土地改革というのは、地主の土地をみんなにわけるところまで、その全体のプロセスを土地改革というのか。

倪：最も肝要なのは、地主の権威を打ち倒すことだ。

016

原新闻片资料与解说词：各级土改工作团深入农村，领导土改，在有 3 亿 1 千万人口的新解放区，土改运动轰轰烈烈。

ニュース映像の解説：各レベルの土地改革工作団が深く農村に入り、土地改革を指導、3 億 1 千万の人口を擁する新たな解放区で、土地改革が激しく進む。

017

解説：林昭在给倪競雄的信中写到：

倪：“土改，谁都知道是我们巩固祖国的一个重要环节。我们的岗位是战斗岗位，这样一想，工作不努力怎么也对不起党和人民”。

倪：枪毙一个地主可以发动一大片一大片的群众，原来不敢说出来的一些话都说出来了。控诉，彻底的灭了地主的威风，然后是四大财产，土地、耕牛、余粮、房舍。四大财产分给农民。

解説：林昭が倪競雄に出した手紙に次のようにある。倪競雄が林昭の手紙を朗読：「土地改革は、周知のように、祖国を固める要務の一つだ。私たちの立場は戦闘員と同じ。こう考えるにつけ、がんばって仕事しないと、党と人民に申し訳がたたない」。

倪：地主を 1 人銃殺すると、大群衆を動員することができる。それまで言えなかったことが全部話せるようになる。告発は、徹底的に地主の権威を壊滅させた。それから四大財産だ。土地・役牛・余剩食糧・家屋、この四大財産を農民に分配した。

018



歌声：人民政府爱人民啊，共产党的恩情说不完啊。呀呼嘿咳……。

人民政府は人民を愛する、共産党の恩情は語りきれない。

土地房产所有证
不動産登記証

019



林昭的信：“我现在真是一无所求，就对家庭的感情

也淡多了，我心中只有一颗红星，我知道我在这里，他（毛）却在北京或莫斯科，每一想起他，我便感受到激动”。

问：当时她对毛泽东是非常的……

倪竞雄：啊！非常虔诚，虔诚到极点，称毛为父亲。

倪競雄が林昭の手紙を朗読：「私はいま何もほしいものはない。家庭への気持ちもずっと薄くなった。心に一つの赤い星があるだけ。私がここにいる、彼（毛沢東）が北京でもモスクワでも、いったん思い起こせば、自分は感動するということがわかった」。

胡：林昭は当時、毛沢東のことを非常に…

倪：尊敬しきっていた、極めて、父親のように。

020



李锐：1958 年毛の秘書，兼水力部副部长。

李銳、1958 年に毛沢東秘書、水力部副部長。

李锐：毛主席万岁这个口号怎么来的，1950 年五一节的口号，那时候刚开始搞口号，五一节、十一节都要公布口号，有这个传统，五一节口号里面“毛主席万岁”，最后一句话是他自己加的，朱老总的秘书揭发的。

李锐：毛主席万岁というスローガンはどこから来たかということ、1950 年のメーデーのスローガンだ。スローガンというものを使い始めたところで、メーデーや国慶節でスローガンを出すようになり、この伝統ができた。メーデーのスローガンの「毛主席万岁」の終わりの言葉（万岁）は、本人が付け足したんだ。朱徳の秘書がそう言っていた。

李锐、周恩来总理。

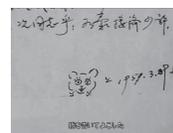
李銳と周恩来総理。

021

解说：中华人民共和国成立以后，毛泽东发展了列宁、斯大林阶级斗争的理论，在全国开展了一个接一个的政治斗争和思想改造运动，使得知识分子和家庭出身不好的人都产生了一种深深的负罪感。

解说：中華人民共和國成立以後、毛沢東はレーニン・スターリンの階級闘争理論を發展させ、全国でつきつきと政治闘争および思想改造の運動を展開し、知識人と出身家庭の悪い者（地主出身者など）に深い罪悪感を負わせた。

022



解说：林昭在给朋友倪竞雄的信中写道：

倪竞雄：“对家庭看法问题，我只单纯的看父母近日来信，一改过去落后的论调，甚为进步。因此就肯定他们不是反革命分子，经过团内同志们的帮助启发才使我认识到为反动派做事这本身就是一种罪恶，更使我认识到自己的政治水平、阶级意识离开党的标准还很远，我需要更好地锻炼自己。”

倪：她写给我的信有时候不写林昭就画一个小猫。

解说：林昭は友人の倪競雄への手紙でこう書いている。

倪競雄が林昭の手紙を朗読：「家庭をどうみるかという問題について私は楽観的にみている。父母の最近の手紙では、以前の遅れた考え方を改めて、とても進歩している。だから、彼らは反革命分子ではないと肯定できる。同志たちの助けと啓発のおかげで、反動派に何かしてやること自体がある種の罪悪だとわかったし、私自身の政治的レベルと階級意識は党の基準からすればまだまだ低次元で、もっと自分を鍛えないといけないと思っている」。

倪：彼女は私に手紙をよこすとき、たまに林昭とサインせずに猫を描いた。

023

李茂章 原土改工作队 政治工作指导员。

李茂章、もと土地改革工作隊、政治工作指導員。

李茂章：她这个人讲话不饶人，不饶人。但不讲违心话，也不做违心事，她讲话的活力很锋利，但她讲理。李茂章：彼女は口がきつかった。人に容赦ない。でも自分をうらぎることは言わないしやらない。舌鋒は鋭く、筋が通っていた。

024



解説：这是林昭参加土改时所工作过的太仓八里乡。

解説：ここは、林昭が土地改革に参加したときの太倉八里郷。

农民：你们原先的房子在那里。

李茂章：两边是厢房，中间是大房。

農民：もともとの部屋はあそこにあった。

李茂章：真ん中が母屋で、左右が脇部屋だった。

解説：原来土改工作队住在这的教堂里，现在教堂被夷为平地。

解説：工作隊はこの教会にいたが、今は更地となっている。

李茂章：这房子什么时候拆的？

农民：文化大革命搞打、砸、抢的时候拆的。

李茂章：当时那里面教徒满满的，我们就打枪，乒乓打枪，那个牧师就出来说话了，他说：你们违反了共同纲领。共同纲领上：人民群众有信教自由，你们破坏我们信教自由。

倪：后来林昭是怎么说的啊？

李茂章：林昭听牧师说我们违反共同纲领，林昭就站出来说：是的，共同纲领上是有信教自由，但是中央有通知，在土改期间宗教活动一般要停止，这样一来牧师就走了。

倪：那这个就是她。

李茂章：ここはいつ取り壊された？

農民：文化大革命の「殴打・破壊・略奪」で取り壊された。

李：当時、教会のなかは信徒でいっぱいだった。我々はパンパンとピストルを撃った。そのの牧師が出てきて話をした。あなた方は共同綱領違反だ、共同綱領では人民には信仰の自由があるというのに、あなた方は私たちの信仰の自由を侵している。

倪：林昭はどう答えたのか？

李：林昭は、我々が共同綱領に違反していると牧師が言ったのを聞いて、立ち上がって言った。「そうだ、

共同綱領には信仰の自由があるが、中央の通知では、土地改革期間に宗教活動は普通、停止しなければならない」と。すると牧師は逃げていった。

倪：これが彼女だ。

025



解説：1952年参加完土改工作的林昭以干部的身份分配到常州民报工作，在这里她深入到工人之中撰写了大量报道，1954年林昭以江苏最优异的成绩考入北京大学中文系，并在红楼杂志社任诗歌编辑。

解説：1952年、土地改革工作への参加を終えた林昭は、幹部として常州の新聞社に配属され、労働者にまじって報道記事をたくさん書いた。1954年、江蘇省最優秀の成績で北京大学中文系に入学、同時に红楼雑誌社で詩歌の編集にあたった。

林昭绘画作品（1955）。

林昭の絵画作品（1955年）。

026



《红楼》北大学校刊

北京大学刊行の『红楼』

张玲 林昭的同学 作家 英文翻译者。

張玲、林昭の同級生、作家、英文翻譯者。

张玲：她的样子，笑着，这两根小辫子，南方式的小辫子，当时南方人的辫子都是这么挂出来的，到这，当时她穿了一件白色的衬衫，然后这里是工裤，我们叫工人裤，这有兜兜的那种，而且裁剪的非常好，那种上海的裁工，那种做工。

问：张老师当时是你们四个人在这里拍的照片吗？

张玲：是。

[5 ページにつづく]